HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「自然宗教に関する対話」の解釈について
Author(s)	植木, 幹雄
Citation	基督教学, 8, 30-33
Issue Date	1973-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46293
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_30-33.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『自然宗教に関する対話』の解釈について

植木幹雄

(1) 宗教に関するヒュームの主著『自然宗教に関する対話』の構造は、パンピルスが性格を異にする三人の対話者の討論をヘルンシップスに伝えるために記録したという体裁になっている。三人の対話者のうちの誰がヒュームの代弁者であるかについて種々の解釈がなされている。それはヒュームの宗教思想を確定する試みでもある。

(2) パンピルスは三人の対話者クレアンテス、フィロ、デミアをそれぞれ「厳密な哲学的傾向」「不徹底な懐疑論者」「厳格な正統派神学者」と性格付け、「わたしにはフィロの原理はデミアの原理よりも一層論証的ではあるが、クレアンテスの原理の方がやはり真理に近いと考えざるをえない」との論評を下して『対話』を閉じている。またギルバート・エリオット宛のヒュームの書簡には、「先にわたしが貴殿に贈った抜粋によって、貴殿はわたしがクレアンテスを『対話』の主人公にしたことにお気付きのことと思いますし、また貴殿がどのようにお考えになりましょうとも、論議におけるクレアンテスの立場を強調することが、わたしには最も納得のくいことです」という文章が見い出される。この互に補ないあう二つの証拠に依拠して、ヒュームの代弁者はクレアンテスである、つまりヒュームは意図による神の存在証明を受入れていたとする解釈が、D. Stewart, B. M. Ewen, F. Jodl, W. Windelband, A. E. Taylor, R. Metz らの人々によってなされた。

(3) 書かれた言葉によるのではなく、ヒュームの思想を貫く論理の内的一貫性を根拠として、ヒュームの代弁者はフィロであるとする解釈が行なわれる。N・K・スミスは「一つの基本的な観点は……ヒューム自身の教説はある一人の性格を通して表現されないのであって、かれ自身の信念は三人全員の口を通して展開されている」が、

もしかりにある一人の性格とヒュームを同一視すべきだとするならば、「フィロは終始一貫してヒュームを代弁している」としているし、他の T. H. Huxley, L. Stephen, F. Copleston なども同様である。しかし、W. H. Capitan が指摘するまでもなく、ヒュームとフィロを同一視することは同じでも、ヒュームの宗教に対する究極的態度に関する解釈では、それぞれ多少の差異が存する。その差異の要点はヒュームは神の存在を論難しようとしたとする解釈とその反対であるとする解釈とに大別することができる。L・スティーヴンは「ヒュームは疑いもなく本心から神学上の懐疑論者であり、宇宙の広大な秘密を占うことの不可能性を十分に知悉していた」とし、またヒュームにとってカトリックの信仰は「狂信 Fanaticism」であり、プロテスタントのそれは「熱狂 Enthusiasm」であるとしていたとする。つまりヒュームにとって大切と思われていたことは、哲学的推論による神の存在証明をしようとして憐むべき遁辞に頼る知的な自殺行為を決して為さないということであったとする。ヒュームをロックの「精神的子孫にして後継者」と、また「カントの父」とみなすT・H・ハックスレーの場合は、フィロの「哲学的懐疑論者であることは学者のうちでも健康な信仰を持ったキリスト教徒であることへの第一の、そして最も本質的な第一歩である」という発言をヒュームの真意とみなしている。コプルストンによれば、ヒュームは少年期に父祖の信仰であるカルヴァン主義を放棄して以後、その死に到るまで「無宗教の人」であった。ヒュームは宗教の公平な観察者として、宗教は超自然的啓示に基づくとする主張に制限を加えることを自己の使命としていた。しかしその意図による神の存在証明の論理的分析は、信仰に新たな基礎を与えようとしたカントに多大の影響を及ぼした。しかしヒューム自身はあくまでも当時の神学的論証や弁明の破壊を目差していた。

(4) ヒュームを有神論者あるいは無神論者とみなす解釈とは異なる解釈も存在する。それはかれを不可知論者とみなす解釈である。J・ノクソンによれば、ヒュームをフィロと同一視することは、ヒュームの基本的な原理の数々がクレアンテスに帰せしめられている点で、またフィロと同一視することは、ヒュームは啓示を信じな

かったにもかかわらず「啓示された真理」についての考察がフィロに帰せしめられている点で、それぞれに難点がある。ヒュームの宗教に対する見解は『研究』において既に明らかである。つまり「理性的にして嫌遜な哲学者」は、自然作用の究極原因などの「一般的原因の原因を発見しようと試みても無駄であり、それらは人間の探求と研究」の範囲外にある。そしてこの結論は、あらゆる哲学の帰着点であるとしているのだからして、ヒュームの『対話』を貫く立場は不可知論である。『対話』は「通常の人間性の吟味」に途を拓くために、神学的論証の無益であることを示すために書かれたのである。というのは、ヒュームは「知りえない事柄」や「答えられない事柄」について論議するのは無益であることを論証する論議は有意義であると考えていたからである。

(5) ところで、われわれはヒュームの宗教に対する究極的立場を如何なるものとして理解すべきであろうか。ヒュームはどのような既成宗教の神をも信じていなかったことは確実であり、またそうした宗教の命じる道徳をも認めなかったことは確かである。しかし、ヒュームはすべての宗教を無視すべきだとはしていない。その内容について詳しく語ってはいないが、かれは「真の宗教」に言及している。問題はヒュームの言及した真の宗教とはどのようなものであるかを明らかにすることである。ヒュームはその内容を直接的に語っていないが、それが如何なる宗教であるかをあえて予想するならば、それは「精神の偉大さ又は人格の尊厳を示す何らかの顕著な実例、気高い感情、屈従を潔しとしない心、徳を自覚することから生じる高貴な誇りと精神」とともにある宗教こそが「真の宗教」ということになるであろう。しかし、そうは言っても、その内容が一段と明瞭になった訳ではない。ヒュームは道徳においても、ある究極的原理や究極的な人間の生き方は、それ自体として明らかになっているのでも、また明らかになるものでもなく、各人の感情の陶冶を通して各人が自己の責任において体現すべきであるというようなことを言っている。このような事情は宗教においても同様であろう。それを自己の生き方において体現しようと努力することはできても、それを言葉で明白に語りえないものに関しては、それの何である

かの決定を各人の真剣な思索とその吟味の結果に委ねるというヒューム的思索の姿勢は『対話』においても貫かれているとすべきであろう。